

事業の名称

学校と田畑をつなぐ地域サポート農学プロジェクト ーあみ食育の新展開に向けてー

〔事業責任者〕

(自治体等側)

阿見町教育委員会学校教育課・課長 朝日 良一

(大学側)

茨城大学農学部・教授 安江 健

事業テーマ：地域の教育力向上

連携先

阿見町教育委員会、阿見町農業振興課、JA 茨城
かすみ阿見営農経済センター

プロジェクト参加者

安江 健 (茨城大学農学部教授・プロジェクト代
表：本プロジェクト全体の企画・調整・
総括)

朝日良一 (阿見町教育委員会学校教育課・課長：
阿見町の行政部分全体の企画・調整)

村松利一 (阿見町農業振興課・課長：学校農園を
活用した食育事業、および小学校での
食育授業の企画・実施)

吉田 浩 (JA 茨城かすみ阿見営農経済センター・
センター長：学校農園を活用した食育
事業の企画・実施)

高田圭太 (茨城大学農学部FSセンター・業務係長：
FS センターを活用した親子での栽培・
収穫・加工一貫体験の企画・実施)

吉田健人・

戸野あすか (茨城大学農学部地域環境科学科4
年：学校農園での食農教育事業への
参画)

宮口右二 (茨城大学農学部准教授・研究推進委員
会地域連携担当副委員長：小学校での
食育授業への教員・学生の派遣調整)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

農学部では阿見町農業振興課と連携して、地元
小学校において平成21年から地場農産物を用い
た学校給食による食育活動を展開しており、全国
でもユニークな取り組みとして注目されている。
本プロジェクトでは、いままでの取り組みをより
発展させ、農学部内の教育研究資源（フィールド
サイエンス教育研究センターを含む）を活用し、
児童や教員および保護者へ「農」のもつ地域環境
保全機能や「食」のもつ健康機能について科学的
理解を深める取り組みへと発展させることを目的
に、平成25年度から開始したプロジェクトの3
年目に位置づけられる。

②連携の方法及び具体的な活動計画

具体的な活動として、従来から実施している
1) 大学教員の小学校への派遣授業を充実し、2)
地元JAが主催する各学校農園へ教員や学生を派
遣することによる食農教育の充実化、3) 観光農
業育成に向けた親子による栽培・収穫・加工一貫
体験に取り組む。特に本年度は、これら1)～3)
に学生を積極的に参画させる工夫を図ることで、
本学農学部生の「地域での学び」を促進すると同
時に、実施者（大学教職員やJAの職員等）と受
益者（児童とその保護者等）間の敷居の低減化を
促進する。1)については従来から町農業振興課
とともに実施してきた実績を踏襲・発展させると
ともに、2)については、圃場管理の補助業務だ

けではなく、実際の授業や成果発表会の場にも学生が参画できるよう、町教育委員会（各小学校）と地元 JA の間で調整を図る。3) については本学 FS センターが企画・実施しているが、町教育委員会を通して広く町民に広報いただくことで、参加者の増加を図る。

③期待される成果

これら 1) ～ 3) の実施により、農学部のもつ農学教育・研究機能を地域の教育力向上に直接資することができ、阿見町という地域コミュニティにおける茨城大学の特徴的な役割が発揮できる。加えて小学校児童を含めた地域住民との交流を通して、本学農学部の学生に「地域」に目を向けることの重要性和そこから学ぶ楽しさを教育できる機会も提供することができる。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

上記 1) ～ 3) それぞれの今年度の活動実績は以下の通りである。

1) 阿見町小学校における食育授業への講師と学生の派遣

平成 21 年度から阿見町農業振興課とともに実施してきた事業の継続・発展の食育授業であり、平成 25 年度からは茨城県立医療大学からも講師を派遣いただいて、「食材の生産・加工・流通過程」の説明（農学部）と「食材の健康機能」の話題（医療大）の両面を講義している。今年度も以下の通り計 6 回実施したが、後半の 3 回分については、昨年度と同様、農学部の担当部分を農学部の学生（主に学部 3 年生）に講義してもらった。具体的には表 1 の日程および内容で、延べ 3 名の教員と延べ 8 名の学部 3 年生を講師として実施した。個々の回の実施内容については農学部の HP にすべて掲載しているので、詳細はそちらを参照いただきたいが、やはり大学生のお兄さんお姉さんが話す授業は総じて子供たちに好評で、質問時間が毎回足りなくなるほどの活況ぶりであった。また、講師として参加した学生は必ずしも教職志

表 1 小学校での食育授業実績

日付	題材	対象学校	講師
6/8	スイカ	舟島小 4 年	宮口右二
7/3	メロン	本郷小 3 年	宮口右二
10/16	お米	吉原小 5, 6 年	新田洋司
11/19	白菜	君原小 4, 5 年	学生 3 名
12/3	ヤーコン	阿見小 6 年	学生 2 名
1/21	ハウレンソウ	阿見第二小 4 年	学生 3 名



図 1 学生による授業風景（ハウレンソウの日）



図 2 実物を持ち込んでの授業（白菜の日）

望者ではなかったが、小学生相手に「わかりやすく説明する」工夫を通して、自分たちの卒業研究や大学での講義の「意味」を体感できたようである。

2) 阿見町小学校における学校農園を活用した食農教育への学生の参画

従来、JA 茨城かすみ農協が阿見町の要請を受けて事業化してきたが、補助事業年度の終了に伴い、JA 茨城かすみ農協の単独では 8 校全てでの実施が困難となり、町も事業として予算を捻出す

ることができず、規模の縮小が余儀なくされていた。そこで本プロジェクトの開始時（H25年度）より、JA 茨城かすみ農協の学校農園を活用した食農教育事業に茨城大学の教員と学生が参画することで、阿見町の全8校の小学校全ての食農教育を展開している。今年度も各小学校の学校農園における作物栽培管理を補助する業務に学生を派遣することに加え、それらの作物を活用しての授業（総合学習の時間）や調理実習、および成果発表会などに学生が参画できるよう調整を図り、参加学生への教育効果を高める工夫を図った。各小学校での本年度の栽培作物は、各学校の要望に応じて表2に示す通りであり、作付け後の5月～収穫時の11月まで、毎週1校あたり1～2名の学生が全8校の小学校を回って除草などの栽培管理を補助した。

これら学校農園への栽培管理補助は、本事業開始当初（H25～26年度）は本学農学部2～3年生が中心となって結成している「のらボーイ＆

のらガール」が学生地域参画プロジェクトの一環として参加してくれていたが、本年度は人数の確保がままならず、農学部地域環境科学科4年生の2名（吉田健人・戸野あすか）が「茨城大学食育サポーター」（FES）として参加してくれた。この2名の学生には大変な苦勞をしていただいた訳であるが、少人数の決まった学生が頻繁に訪問す



図3 落花生のポッチ作りの指導補助



図4 お姉さんといっしょに調理しました



図5 社会科の授業でゲストティーチャーに

表2 各小学校での主な栽培作物		
小学校名	栽培作物	対象学年
阿見	落花生	3年生
	ヤーコン	3年生
阿見第一	落花生	2年生
	ジャガイモ	6年生
阿見第二	落花生・ヤーコン	3年生
	ジャガイモ	6年生
	サツマイモ	全学年
本郷	落花生	2年生
	ヤーコン	3年生
	ジャガイモ	6年生
吉原	落花生	4年生
	ヤーコン	3年生
	ジャガイモ	6年生
実穀	ゴーヤー	4年生
	ヤーコン	4年生
舟島	落花生・ゴーヤー	4年生
	ヤーコン	3年生
君原	落花生	
	サツマイモ	1・2年生
	ゴーヤー	4年生



図6 「感謝の会」にお呼ばれ



図7 ヤギのブラッシング体験

ることで、単に栽培管理の補助だけでなく、学校の教育現場へは例年以上に積極的に参画させていただくことができた。具体的には上記作物の収穫時に実施する「総合学習」の時間(図3)や、これらの収穫物を用いた「調理実習」(図4)、さらに本年度は社会科の「阿見町を知ろう」の授業において、茨城大学農学部を紹介する時間を作っていた(図5)。このことは、児童や先生といった地域の人々とともに収穫を体験できる喜びとともに、子供たちの成長に直接触れる場に同席できたというより大きな経験を、学生達に共有させたことと思われる。またこれら一連の活動を通じて、「感謝の会」(図6)で子供達から寄せられたお礼の言葉は、何にも代えがたい喜びと思い出になったであろう。このように、事業実施主体であるJA茨城かすみ農協や各小学校はもちろんのこと、子供たちやその父兄とも、作物を栽培してその作物の特徴や利用法を学ぶことの楽しさを学生たちが共有できたことは、本事業の最大、かつ最高の成果であったと考えられる。

加えてこの事業2)部分では、これらJA茨城かすみ主導する食農教育とは別に、本年度は子供たちへの「命の教育」に関する試行的取り組みも実施した。こちらは吉原小学校1、2年生の生活科の授業として、小学校にヤギを連れて訪問し、ヤギとのふれあいを通して「いきものとなかよし(1年生)」「生きものはっけん(2年生)」の単元を実施するものであった。具体的には7月9日と12月10日の2回、安江と学生のべ5名で

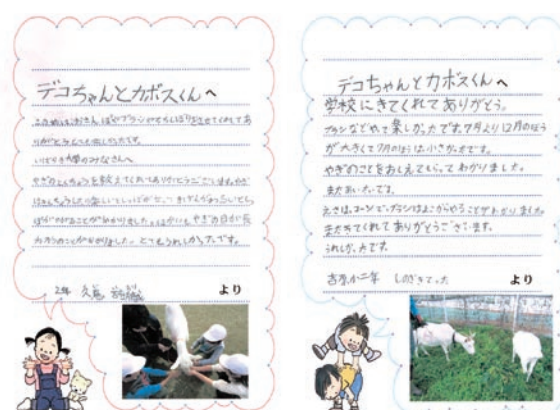


図8 ヤギたちへの感謝の手紙



図9 常陽リビング(2015.1.16)で紹介された「ヤギによる命の教育」

ヤギ母子1組を連れて訪問した（図7）。やはり見たこともないヤギの子供たちへのインパクトは大きく、ブラッシングや搾乳体験、散歩や給餌を通してヤギという生き物の不思議さや、子ヤギの成長の速さに驚いていた（図8）。今年度は試行的取り組みとして吉原小学校のみで実施したが、このヤギの派遣授業についてはめずらしさも手伝ってマスコミからも取材を受けた（図9）。

3）茨城大学農学部 FS センターでの親子による栽培・収穫・加工一貫体験

本事業は本プロジェクト開始時（H25 年度）から開始した事業で、昨年度より本格的に実施し、本年度には新たに「豆腐作り」の体験も含め、計4回実施した（表3）。昨年度の反省から、今年度は小学校の行事と日程を調整し、さらに出席した保護者を通して広報いただいた結果、9～23名とほぼ定員通りの参加者を得ることができた。

10月に開催した栗の収穫体験では、講義室内で栗の保存方法や害虫について技術職員から簡単な説明を行った後、果樹園で栗を収穫した。その後、集めた栗を水洗し簡単な選別を行いながら（図10）、あらためて害虫や品種の説明を行うことで参加者の栗に関する理解を深めることができた。

11月に実施した柿の収穫・試食体験では、講義室内で柿の種類や脱渋について技術職員が説明を行った後、果樹園で柿を収穫した（図11）。また収穫終了後に甘柿や渋柿の試食も行った（図12）。小学生の答えたアンケートには、渋柿についての感想が多数見られ、参加者は甘柿と渋柿の違いを、体験を通して学べたと考えられる。

11月に実施した豆腐作り（図13、14）は今年度から新しく用意したプログラムであり、豆腐を

作る際に出てくるオカラを使った蒸しパンも同時に作成した。後日行ったアンケート結果では、大豆が豆腐が変わっていく過程を間近で見ることができて良かったと好評であった。このプログラムでは調理器具を大量に使うため、後片付け（洗い物）を参加者に行ってもらった。この点について参加者のアンケートでは、自分の使った器具を自



図10 栗の洗浄を体験



図11 柿の収穫体験



図12 柿の食べ比べ体験

表3 FS センターでの一貫体験

日付	内容	参加者数（子+親）
10/3	栗の収穫	9（5+4）
11/3	柿の収穫・試食	17（9+8）
11/14	豆腐作り	10（5+5）
11/28	小麦からのパン作り	23（12+11）



図 13 大豆から豆腐を作ろう



図 15 小麦からのパン作り



図 14 完成した豆腐

分で洗うのは当たり前と参加者全員が答え、子供が後片付けをすることも重要と答える保護者もいた。豆腐の出来栄えについては、事前に何回も試作を行い作業のポイントを職員が理解して指導したこともあり、どの参加者も失敗することなく豆腐を作ることができた。大豆の味がして市販の豆腐よりおいしいというアンケート結果だった。

小麦からのパン作り（図 15）は午前と午後の 2 回に分けて行ったが、午前の部において農学部 of 学生 2 名もスタッフとして加わり、加工室内で参加者の指導を行った。学生・参加者ともに教育的効果があるので、今後も続けていくことが重要と考えられる。例年同様、講義室内で生地 of 捏ねや成形について説明した後、小麦から粉を作る過程を製粉しながら説明し、加工室内でパンを作ったり、空いた時間を利用してグルテンと粉の種類について理解を深めた。

②プロジェクトの達成状況

1) の食育授業に関しては、従来からの継続であることに加え、本年度も学生が積極的に授業に参加してくれたことから、ほぼ完成形で達成できた。つまり、大学教員と小学生の間に存在する「敷居」の低減化は、学部学生を介在することで見事に達成できた。加えて教職志望の学生にとっては、本学の「教職実践演習」で使用する「学びのあしあと」に記載して自らの教育体験の振り返りに活用できた点で、教育効果を高めることができたと考えられる。

2) の学校農園参画事業については、本年度も 8 校全てでの食農教育が達成できたことに加え、参加した学生の「地域」に対する興味や課題意識が醸成できたこと、および「子供たちに農作業を指導する責任と喜び」という何にも代えがたい体験を本学の学生に付与することができた。残念ながら今年度は実質的な参加者は 2 名と少なかったが、この 2 名の学生は「茨城大学 Food Education Supporter (FES)」を結成し、わずか 2 名で学校農園参画事業部分を積極的に支えてくれた。その点で、この 2 名の学生にとって教育効果は絶大であったと考えられ、こちらも完成形で達成することができたと評価できる。

本年度試行的に実施した「ヤギを用いた命の教育」部分は、1 校のみであったものの小学生への教育効果はわずか 2 回の訪問でも非常に高かった。「食」から「命」への教育転換も今後は本事業で検討すべきと考えられる。

平成 25 年度から新たに立ち上げた 3) の事業も、準備段階に時間がかかったものの、本年度はほぼ計画通り実施でき、参加者の評価も極めて高かった。また昨年度までの反省から、本年度は本学学生を親子体験教室の講師として参画させることもできた。他の事業同様、教員（職員）－子供の中に大学生のお兄さんお姉さんが入ることは、子供や父兄への敷居が低くなり、教育効果は格段に高まる。その点で、後発であった 3) の事業も、完成形として達成することができたと考えられる。

本年度は 1) ～ 3) の全ての部分において、本学学生の主体的な参画をはかることができ、それゆえ子供たちに対する教育効果も高めることができた。もはや茨城大学農学部を中心とする学生たちの参画は、阿見町の食育事業に無くてはならないものになりつつあるという点で、本プロジェク

トは 3 年間を経てほぼ完成したと評価できるだろう。

③今後の計画と課題

上記の通り、本プロジェクトは最終年度の 3 年が経過した。次年度以降は新たな方向として、本年度試行的に実施した「ヤギ訪問授業」に見る「命の教育」へ質的に転換してはどうかと考えている。「食」→「生命」への教育の質的転換となるわけであるが、その企画・推進には今まで本プロジェクトで得たノウハウや人脈が生かせるものと考えている。阿見町の食育・食農教育では従来より「動物（つまり畜産物）」部分が弱いことを考慮し、次年度以降は学校に動物（ヤギ）を訪問させる取り組みを拡大し、将来的には総合学習の時間等での活用につなげたいと考えている。